「みえ森林教育ビジョン」実現のための効果検証方法の提案

令和 3～5 年度（森を育む人づくりサポート体制整備事業）

石川智代

三重県は、県内における森林教育を推進するため、令和 2 年 10 月に「みえ森林教育ビジョン」を策定した。小学生を中心に幼児から大人まで各年代を対象とした森林教育プログラムを作成し、このビジョンの実現に向けた取組を強化するとした。一方で、実行するプログラムがみえ森林教育ビジョンの実現に有効な内容や構成であるか検証を行うとともに、プログラムのブラッシュアップを重ねていく必要があると考えられる。そのためには、期待する森林教育の効果を明確にし、その効果検証方法も含めて森林教育プログラムを作成することが望まれる。そこで、令和 3 年度は、森林教育効果の持続性に関する事例検証として県内の小学校 1 校の 5 年生児童を対象にアンケート調査を行うとともに、官民問わず三重県内外で実施された森林教育活動に関する既往研究の論文や事例を収集してデータベースを作成した。

1．森林教育の効果の持続性に関する事例検証

森林教育の検証事例は、三重県総合博物館が実施した森林に関する出前講座とした。令和 3 年 6 月に津市の市街地にある公立小学校の 5 年生 2 クラス合わせて 45 名の児童が受講した。講座は、博物館職員がクラスごとに教室でスライドを使用して「三重県の森林が危ない！」を主題に「ナラ枯れ」「シカによる剥皮害」「マツ枯れ」について 1 時限 45 分間で説明を行った。

検証のためのアンケート調査は、学校長と担任教諭の協力を得て、出前講座から約 9 か月後（令和 4 年 3 月）に実施した。アンケート票は、出前講座の「ふりかえりシート」として選択式 3 問と記述式 2 問の無記名とした。5 年生児童全員に授業時間中の 15 分程度で記入してもらい、回答数は 41 名、回答回収率は 91％であった。

アンケートの結果、講座内容の記憶について 4 段階で自己評価する設問では、「少し覚えている」と「よく覚えている」を合わせると約半数の児童が講座内容を「覚えている」と回答した（図-1）。また、三重県の山や森林と自分との「つながり」について 4 段階で自己評価する設問では、「たまに感じる」と「よく感じる」を合わせると、4 人のうち 3 人は「つながり」を感じると回答した（図-2）。これらのことから、小学 5 年生では、教室で受講した森林教育の内容を概ね理解して、9 か月程度は記憶していると考えられた。アンケート調査は林業について通常授業で学習した数日後に行ったが、木が枯れて発生する問題を「木材・木製品」と関連付けた回答は 21％にとどまった。小学 5 年生児童にとって、自発的に人の生活や社会と森林や山で起こる問題を関連付けて捉えることは難しいと考えられるため、児童自身と森林や林業との「つながり」を意識させる指導の工夫が必要と考えられる。

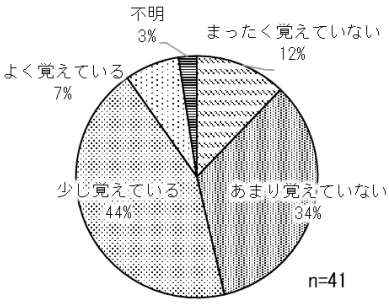

図-1. 講座内容を覚えているか？

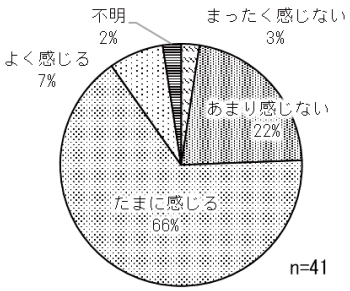

図-2. 三重県の山や森林と「つながり」を感じるか？

表-1. 三重県の山でたくさんの木が枯れると、どんな問題が起こると思うか？

	回答数	回答比率
動物の棲み処の減少・消失	18	44%
土砂崩れ（災害）	8	20%
木製品の材料不足	7	17%
空気のよごれ（CO_2、温暖化）	6	15%
動物が町に来る	3	7%
無回答	11	27%